

子どもの音遊び

—保育現場の音楽遊びを小学校音楽科の授業に
つなぐことを視野に入れて—

平松 愛子

A Study on the Sound Play of Preschool Children
—With a View to Connecting the Music Play at the Nursery School
to the Music Class at the Elementary School.—

Aiko Hiramatsu

Abstract

The author has been conducting sound play activities in the nursery school near the university since 2011 in order to make children have an interest in “sound”. The students who belong to the seminar take the lead in the activities. In order to actively take the lead in the activities, it is necessary for the students to devise and plan various ways to support children. And also, the students will be able to see the children’s actual reactions against various sounds. Through the great experiences, the seminar students have learned a lot.

This paper shows the result of study on children’s sound play activities that will be connected to music class at the elementary school, from the point of new “childcare guidelines for nursery school” and new “elementary school learning guidelines for class of music”. It also refers the teaching method for the seminar students who need to learn basic matters requires for sound play at nursery school.

Keywords: music play, sound play, ways to support children,
childcare guidelines for nursery school, music class at the elementary school

I. 研究の背景と目的

この度、平成 29 年 3 月に「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が同時に改訂(定)・告示され、施行は平成 30 年 4 月からとされている。改訂(定)された「幼稚園教育要領」の領域「表現」での「内容の取扱い」において、「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色な

どに気付くようにすること。」さらに、「様々な素材や表現の仕方に親しんだり、」という文言が加えられた。

子どもの感性は、生活の中で美しいものに出会い、心動かす出来事に触れ、様々な経験から得た感動を伝え合うことで育っていくものである。また、その感動を共有し、感じたことやイメージしたことを言葉や音、動き、描くこと、さらにその感動に添って物を作り、演じながら表現すること、そして、表現することそのものを率直に楽しむことで育っていくものであろう。保育者には、子どもが感じた感動を共有し、子どもの表現や表現したいという意欲を受け止め、子どもが表現活動をおこないやすいように、遊具や用具、種々の素材を用意し、さまざまな表現の仕方ができるような環境を整える工夫が望まれている。その上さらに、他の子どもの表現にも触れることができるよう配慮するなど、遊びを通した総合的な指導力も求められている。

平成30年4月からの施行に向けて今年度はその周知期間となっているが、保育者養成校においても、今回の改訂・改定のポイントと内容を踏まえた授業を展開すべく、授業内容や方法を見直しているところである。筆者は、本学において「音楽表現（指導法）」や「ピアノ」、「音楽（器楽）」など音楽に関わる授業を担当している。三法令の領域「表現」に記載されていることを考慮しながら、改定のポイントを踏まえた授業内容とするように、そして学生の深い学びにもつながるようにと、現在、筆者も具体的な指導方法を検討中である。

筆者は、子どもたちに「音」や「音楽」に興味を持ってもらうことを目的として、平成23年度より本学近隣の保育園において、様々な年齢の子どもたちを対象とした音楽遊びの活動をおこなっている。この活動は、子どもたちの音楽遊びについて考えることをテーマとする筆者のゼミを受講する学生たちの研究も兼ねており、子どもたちへの援助・指導はゼミ生が主体的に担当している。学生のみならず筆者にとっても、子どもたちへの援助の仕方・関わり方を検討する機会として、そして何よりも子どもたちの生の声・反応を知ることができる貴重な場となっている。

本稿は、音遊びをおこなう子どもたちに援助する際の具体的な方法について述べたものである。そこには、これまで当研究室が実施してきた音遊びで子どもたちが見せた生の反応や援助を担当したゼミ生が経験したことなどを反映させている。また、音楽遊びで子どもたちに支援をおこなう学生への指導法についても平成29年3月に告示された教育要領や保育指針に照らしながら検討し、保育現場での音楽遊びを小学校の音楽の授業につなぐという観点からも考察を加えている。

II. 音遊びの意義及び保育者と子ども環境との関係

井口（2014）らは、「新・幼児の音楽教育 幼児教育・保育者養成のための音楽的表現

の指導」の中で、「音」と出会う子どもへの保育者の理解と援助について以下のように述べている。

『ブランコのきしむ音～中略～容器に何かを入れて揺り動かす音、棒などで何かをたたいたり、擦ったりするときの音、風が木の枝をゆする音、霜柱を踏みしめる音など、子どもが音と出会い、これを楽しんでいる姿にも注目したい。～中略～ 幼児が音を楽しみ・味わいながら自ら「遊び」を展開していると考えることができる。これは明らかに「音楽的な遊び」ないし「音楽的な表現活動」である。われわれは、このような幼児の姿に、どのような意味を与えることができるのだろうか。～中略～「音」との出会いなどは、幼児自身も「表現」として意図的に行っていない場合が多い。見落とせばその場限りで終わってしまうだろう。その面白さに、われわれ自身が敏感でありたいのである。「面白い音だね」という一言の共感が示されるだけで、その音とのふれ合いは意識化される。～中略～魅力が意識されることで活動が継続されたり、さらに音を見つけようという関心に結びつくかも知れない。』 「新・幼児の音楽教育 幼児教育・保育者養成のための音楽的表現の指導」代表編著／井口太 (2014 朝日出版社) p.36 より

また、小西(2017)らは、「赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第2巻運動・遊び・音楽」の中で、『音や音楽に関係する保育においては、子ども自身が音との触れ合いを楽しむことが大切です』と述べている。「赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第2巻運動・遊び・音楽」一般社団法人 日本赤ちゃん学協会編集 小西行郎・小西薫・志村洋子 著 (2017 中央法規) p.130 より

以上論じられる通り、子どもが音と触れ合うこと、子ども自身で音との触れ合いを楽しむことが、子どもの音楽的表現活動にとっての重要な礎になるものと筆者も考える。

Ⅲ. 音遊びの全容

1) 音遊びの主旨と流れ

当ゼミが行う音遊びのねらいは、子どもたちに生活の中の音や身近にある様々な素材を叩いたり擦ったりした音を聴いてもらい、身近な音に興味・関心を持ってもらうことである。さらに音の強弱、高低、叩き方による音色の変化など、音の様々なニュアンスに気付いてもらうことである。そして、子どもたちがそれぞれで身近な素材を選んでマイ楽器(音の鳴るおもちゃ)を作り、作った楽器を使って合奏し、年齢ごとに発表し合うことを通し、音楽での交流を楽しんでもらうことである。音遊びの実施は、全体を次に示す①～④の遊びに分けて行うものとし、全体の所要時間は約90分である。

①音探し遊び(約15分)

②身近なもので楽器作り(約40分)

③手作り楽器で歌遊び(約20分)

④手作り楽器で発表会(約15分)

2)環境設定とその理由

2歳児から5歳児までと成長差が著しい園児の音に対する年齢別の反応を観察したいと考えたため、お遊戯室などの広い空間で同じ遊びを全園児が一緒になっておこなう方法を採った。その際、観察をおこないやすいようにと、年齢別に席別してもらうこととした。「③手作り楽器で歌遊び」のみ2つの保育室に分かれておこない、「④手作り楽器で発表会」は再びお遊戯室に全園児を集めておこなった。

3)遊びの実施日

音遊びは、上述した通り①～④の遊びに分けて行うこととしているが、遊びの実施日・実施場所は①と②③④とは異なっている。それぞれを実施した際には、リズム遊びや、歌遊びと関連した劇あそびなど他の音楽遊びも同時に実施している。

実施日及び参加した園児数等は次の通りである。

①音探し遊び

実施日・場所 平成28年11月18日(金) 飯塚市内の私立保育園 お遊戯室
観察の対象者 95名(2歳児22名、3歳児24名、4歳児22名、5歳児27名)

②身近なもので楽器作り・③手作り楽器で歌遊び・④手作り楽器で発表会

実施日・場所 平成27年10月24日(土) 飯塚市内の私立保育園^{※1} お遊戯室
観察の対象者 71名(2歳児20名、3歳児16名、4歳児17名、5歳児18名)

なお、実施に際しては、企画、材料集め、会場設営などの事前準備から子どもたちへの支援、司会進行、反省会までを当ゼミの学生が主体的に行動することとした。進行役を担うゼミ生は1名とし、他のゼミ生が園児の音に対する反応や遊び全体の観察・記録を担当した。また、デジタルカメラによる撮影は、筆者が担当した。

※1) ①の遊びを実施した保育園とは異なる保育園である。

4)遊びの準備

あらかじめ用意していた様々な材料(ゴム製マット、紙コップ、プラスチック製バケツ、アルミ缶、スチール缶、ビー玉、空き瓶、ペットボトル、カップ麺容器)を座っている園児全員から見えるように数台の長机上に並べる。また、ガラス製コップ数個を長机上に一列に並べ、水量を適切に調節しながら音階順となるように水を注ぎ入れる。

5)各遊びの概要及び子どもの反応

それぞれの遊びについて、その概略と子どもに見られた反応を以下に記す。

①音探し遊び

まず始めに、様々な素材でできた身近な物を使って叩いたり擦ったりして学生が音を出し、園児が、どのような音が出るか想像しながら学生が出す音を聴く遊びをおこなった。この遊びのねらいは、普段の生活で身近に使っている物から発せられる音に関心を向けること、また、音の強弱、高低、叩き方による音色の変化など、音には様々なニュアンスがあることに気付いてもらうことである。

スキップの足音を聞いて、足音と同じリズムで手拍子していた3歳児がいた。次いで、様々な音を聴かせると、5歳児が我先にと「ドンドン」「ゴロゴロ」などの擬音語を発し始めた。この実演の前に、どのような音が聞こえるか想像するよう促したが、その際は、「トントンっち言うばい！」と予想を口にしていたが、実際に聴いて、「あっ、違う！ドンドンやった！」と言っていた。一人がそのような発言をした後は、次々に賛同する子が増えた。カーテンの開け閉めの音には、「シャーっち聞こえた！」とある子が言うと、「違うばい、ジャーやん！」と別の子が言い、また他の子が「違うちゃ、シャアアアアアばい」と発言していた。これを聞いていた4歳児は、5歳児の発したオノマトペを真似て、数回は5歳児と同じオノマトペを口にしていたが、そのうち、4歳児が個々に感じたオノマトペをそれぞれ口にするようになっていった。さらに、その隣の3歳児も4歳児を真似てオノマトペを発していた。中には2歳児にもおうむ返しのように真似をする子も出てきていた。この様子を見て、年少児が様々な場面で年上の子の言葉や動きをこのようにして真似していくものなのかと、ゼミ生は感じる事が出来たようだ。

音探し遊びの最後は、空のグラスの縁を叩きながら水を注ぎ入れていくものである。その際に水量に応じて少しずつ音の高さが変わっていくが、この変化して行く音を聴くと、園児たちの中から「ワ～！」という大歓声が上がった。あらかじめ水を入れておいたガラスのコップの縁をマドラーで叩いて音階を鳴らし、その後「ちょうちょう」を演奏したが、ある2歳児はノリノリになって全身でリズムを感じていた様子であった。

②身近なもので楽器作り

これは、廃材や身近なものを組み合わせて自分で楽器（「音の出るおもちゃ」）を作り、期待した音が出るか、どのようにすればより良い音を出せるかを体験する遊びである。

前述した材料に加え、ここでは、さらに小豆や大豆、トウモロコシなどを使う。園児たちは、小豆やトウモロコシを紙コップやプリン用のカップに入れ、思い思いに振ったり叩いたりして音を出し、様々に音が変わることを実感する。また、振り方や叩き方だけでなく、入れる豆の量によっても音が変わることを実体験する。ここでは、パチとしてビニールテープを巻いた割り箸やプラスチックスプーンを園児たちが持って遊ぶため、安全面に配慮して、振り回したり人に向けて突いたりしないよう“おやくそく”として伝えた。

2歳児は、多くが「楽器作り」までに至らず、豆をひたすら入れるだけ、ちぎった折り

紙を容器に張り付けるだけで豆を入れないままに終えていた。

しかし、3歳児は、いろいろな材料をじっくりと見て回っており、どのような楽器を作ろうかと思案顔の園児もでてきていた。容器に豆を沢山入れすぎて、振っても音が鳴らない園児も数人いたが、それを見ていた他の3歳児たちは、沢山入れないように気をつけていた。また、豆を入れた容器を振って音を出すだけではなく、手で太鼓のように叩いて、豆が容器に当たって出る音と叩いたことで出る音の両方を楽しんでいる園児もいた。

4歳児には、叩いてどのような音がするかを試しながら容器を選んだり、種類の豆ではなく何種類もの豆を混ぜて容器に入れたりしていた。紙皿を使う場合は豆がこぼれないようにもう1枚の紙皿を蓋となるよう重ねて使う工夫をしたり、豆を入れた容器をバチで叩いて太鼓に見立てたりする園児も見られた。また、友達と一緒に楽器を振り音を鳴らし合って楽しんでいた。

5歳児は、多くが材料や容器を選ぶ際に、素材そのものからどんな音が鳴るかをいろいろ試したり、友達のととは違う大きさや、違う素材の容器を選んだりしていた。厚紙を折り畳んだものやプラスチック製スプーンを太鼓のバチに見立てたり、カラーテープや色画用紙を貼って飾りつけたりしながら、自分だけの楽器を作ることを楽しんでいる様子を見せていた。何度も音を出して試しながら、丁度良い音になるよう、容器に入れる豆の量を調節する園児、一度楽器を作ったが納得がいかなかったのか作り直しているなど、試行錯誤しながら作っていく様子が見られた。中には、大きな発泡スチロールを使って1台2役でピアノと太鼓を作ったり、ティッシュ箱を使ってギターを作ったりと自分の知っている楽器を作ろうと工夫を凝らす園児もいた。このピアノと太鼓を作った5歳児は、何枚もの白と黒の折り紙を小さな短冊状に切り、位置を巧みにずらしながら大きな発泡スチロールに丁寧に貼り付け、ピアノの鍵盤を見事に表現していた。この5歳児が集中力と根気のいる作業を楽しそうにおこなっていた様子は強く印象に残った。

5歳児に見られた特徴は、出来上がった楽器を友達や保育者に自慢げに見せたり、自作の楽器を友達の楽器と交換して音を確認め合ったりするなど、他者へのアピール、他者が作ったもの・音に対する興味を示すなど、他者とつながりを持とうとしている姿が見られたことである。

③手作り楽器で歌遊び

この遊びは、「②身近なもので楽器作り」で作った自作の楽器を自分で演奏し、みんなで歌いながら合奏する楽しさを味わうことをねらいとしたものである。この遊びは、2つの保育室に分かれておこなうこととした。2歳児と3歳児を1つのグループとし、程よい長さの季節の歌として「山の音楽家」を選曲した。一方、4歳児と5歳児も合わせて1つのグループとし、短い練習時間でもリズムに合わせて演奏しやすい歌として「まつぼっくり」

と「おもちゃのチャチャチャ」を選曲した。

2歳児の中には、音楽に合わせて演奏しようとしてもなかなかタイミングが合わず、ただ音を鳴らし続ける園児や、音楽に合わせるというよりは、ただ楽器を振って音を出しているだけの園児がいた。また、3歳児が音楽に合わせて歌いながら楽器を鳴らしている時に、静かに聴いているだけ子どももいれば、一緒になって自分の楽器を鳴らしている子どももいるなど様々であった。楽器の扱い方についても、壊れないよう大切に扱う園児がいる一方、思いっきり楽器を振ったり叩いたりして力いっぱい鳴らす園児も見られた。

3歳児には、作った楽器が壊れないように大切に持って、自分の保育室に移動していた園児がいた。思いっきり楽器を鳴らし過ぎてタイミングが合わず、音楽とずれている園児、曲の初めから終わりまでずっと鳴らしっぱなしの園児が数人見られたが、「山の音楽家」の歌詞の「キュキュ キュッキュッキュ」の「キュッキュッキュ」の部分でタイミング良く鳴らしている園児もいた。2歳児の演奏を聞く際に、待ちきれず一緒に音を出す子がいたが、多くは静かに聴くことができる3歳児であった。

4歳児になると、素早くピアノの前に座って、司会進行の学生が説明している間に待ちきれずに楽器を振って音を鳴らす園児がいた。ゼミ学生と一緒に「まっぼっくり」を大きな声で歌っていた園児もいる中、歌いながら楽器を鳴らすのではなく、ただ単に楽器を振り鳴らすだけという園児も見られた。紙皿で作った太鼓をプラスチックのスプーンや割り箸をバチとして使って演奏する園児もいた。ペットボトルの蓋がきちんと閉まっていなかったために強く振った時に豆が飛び出してしまい、悲しそうな表情の園児もいた。4歳児には、作った楽器を嬉しそうに保育者に見せながら鳴らしていたり、「自分だけの楽器」という気持ちからか、大切に扱っていて、とても気に入っている様子の園児がいたり、自分の作った楽器を「持って帰ってもいい？」とゼミ学生や保育者に尋ねるなど、愛着が湧いている様子を見せている園児もいた。

5歳児の多くは、ピアノの前に静かに座って待っていたり、作った楽器を学生に自慢気に見せたり、友達どうして楽器を見せ合ったりしていたり、また、大きな声で元気良く歌っていたり、楽器も一生懸命に鳴らしているなど、音楽遊びを大いに楽しんでいる様子を見せていた。特に「おもちゃのチャチャチャ」の歌詞の「チャチャチャ」の部分で、多くの5歳児がリズムよく鳴らしながら大きな声で歌っていたことは印象的であった。中には、「全然難しくないよ！ぼくできるよ！」と言う園児すらいた。前述した一つの大きな発泡スチロールでピアノと太鼓を作った5歳児は、合奏の最中に作った鍵盤に指を立ててピアノを弾く動作をしても音が鳴らないことに気づき、「音が鳴らん、音が鳴らん」と悲しそうに言って、一方の太鼓の部分の叩いて音を出して合奏に参加していた。

④手作り楽器で発表会

この遊びは、前述した「③手作り楽器で歌遊び」で合奏した「山の音楽家」、「まつぼっくり」、「おもちゃのチャチャチャ」を再び同じ空間に集まって発表し合うものである。また、これらに加え学生がハンドベルで演奏する「にじ」に合わせて全員で手作り楽器を演奏するものである。作った楽器の音色を披露する楽しさ、お友達の作った音色を聴くこと、さらに同じ曲を全員で合奏し大勢で音楽活動をおこなうことの楽しさを味わうことをねらいとしている。「にじ」は、事前の打ち合わせで園児たちがいつも歌っている皆が大好きな歌であるとのことで選曲した。

全員での合奏に先立って、各保育室で練習したそれぞれの曲を披露することから始めた。

園児たちの反応は、2歳児については、隣にいる友達や4歳児、5歳児を見ながらおずおずと楽器を鳴らす様子であったが、3歳児については、待ちきれずに4、5歳児の演奏に合わせてながらも自ら楽器を鳴らす園児が多くみられた。

4歳児には、2歳児と3歳児が「山の音楽家」を演奏している時にも一緒に楽器を鳴らしている園児がいた。また、ゼミの学生がハンドベルで「にじ」を演奏している時には、歌を口ずさむ園児、楽器を鳴らす園児、歌いながら楽器を鳴らす園児がおり、皆が自発的に合奏に参加している様子を見せていた。

5歳児では、ほとんどの園児が静かに2歳児・3歳児の「山の音楽家」の演奏を聴くことができていた。また、ゼミ学生がハンドベルで「にじ」を演奏し始めた際、何の歌なのか分かる少しづつ歌詞を口ずさむ園児が増えていき、ついには大合唱になっていた。そして歌うと同時に、生き生きとした表情で楽器を鳴らしていた。この様子から、「にじ」がこの保育園で何時もよく歌われており、園児みなが本当に大好きな歌であるということがよく納得できた。

IV. 音遊びの課題

当ゼミが続けてきた音楽遊びの目標は、音や音楽に親しみを覚え、関心を抱くようなきっかけとなる機会を提供することである。「音」には、自然の音や身近な生活の中での出る音、人工的に作り出した音、その中には安らぎ感じる音や素敵・好きだと感じる音や、好きではない・不快と感じる音など様々な「音」がある。子どもたちに日常の私たちの身の周りにはたくさんの「音」が溢れていることを、まずは実感してもらうことから始めている。その後は、その音を自分で生み出し、リズム、音階を整えて「音楽」として自分なりに表現するまでを体験できる場を設けることを目指している。その一過程、出発点として保育の場を借り、園児を対象とする音遊びの活動を実施してきたつもりである。

なお、当ゼミが行ってきた音遊びでは、保育施設で2歳から5歳までの幅広い年齢の子どもを同一会場に集め、皆一緒に同じ遊びをする方法を探っていた。しかし、同一年齢層の園児を集めておこなう場合には、音遊びの内容や援助の方法をその園児の年齢に合わせて

て実施することは当然である。

いずれにしても、園児たちは集中力を長く保つのが難しい年齢でもあることから、あそびの援助者はその点にも配慮して園児全員に気配りし、明るく楽しい雰囲気醸し出す工夫が必要であろう。援助者自身が気さくで温かみのある声、態度で接することは必須である。

一方、物理的な環境、材料、道具等の準備を怠りなく整えることも当然ながら重要である。その中には、あそびの際の園児の様子を観察し記録することも含まれる。

以下に、当ゼミがこれまで実施してきたあそびの記録の中から抜粋した項目を、課題として箇条書きで示す。

- 1) 遊びの司会・進行を担当する援助者が醸し出す雰囲気が重要である。
- 2) 「一緒に歌いましょう」と声を掛けられて歌い出すのではなく、園児たちが自ら手を叩いたり歌ったりする表現活動を、自発的におこないたいくなるような援助の仕方を工夫する。
- 3) 同じことの繰り返しも大事であるが、いつもとは違うことを体験できるよう心掛ける。
- 4) 時間を区切ることは次の行動へのメリハリがつくという考え方もあるが、子どもの自発性が損なわれてしまう可能性もあるため、敢えて時間で区切ることはせず、子どもの「これをしたい」と思う気持ちを優先させることも一つの考えである。このことは自発性の発達にもつながるであろう。

V. 援助を担当する学生への指導法

保育園でおこなう音遊びの成否は、遊びを援助する人の表情、仕草、声や話し方などの雰囲気が大きく影響する。例え少々準備不足や、想定外の事態があったとしても、援助者の笑顔、明るい表情、優しい声掛けがあれば、その遊びは良い結果に結びつくであろう。遊びに参加した園児の記憶には楽しく暖かな思い出となって残り、音や音楽に対する印象も好ましいものとして記憶されることであろう。

その基本を念頭におくことは当然のこととして、今後の学生指導に必要と思われる具体的なことを例として以下に示す。これらには、あそびを実行したゼミ生たちが残っていた記録や、反省会に参加してくださった主任保育士から頂いたアドバイスを参考にした内容も含まれている。

- 1) 遊びに参加していない園児にこそ目を向け、楽しく遊べるよう声掛けをする。
- 2) 園児と同じ目線となるよう、援助者はしゃがんだり腰を屈めるなどの気配りをする。
- 3) 予め園児の反応パターンを予想しておき、さらに万一予想通りの反応が無いときの援助者として望ましい声掛けや行動も覚悟しておく。
- 4) 必要以上に援助者が手出しをしたり口を出したりすることを慎み、園児たちが自分自身で考えて行動できるような声掛けに努める。

- 5)園児と対等な立場で接し、話す。先生だから、保育者だからという感覚は敢て持たずに遊ぶ。
- 6)園児に「今こういうことをしてはダメよ」といった「ダメ」という言葉は使わない。
「今こういうことするのは、（したいだろうけど）少し待っていてね」と園児が今したいことの気持ちに寄り添う。「ダメ」という表現は、園児が本当に危ないことをした時のみ使う。
- 7)楽器作りの際には、援助者も事前にオリジナルの楽器を作っておき、園児が作り終わった後の合奏の時に初めて見せて、一緒に演奏をする。援助者の作った楽器の音を聞けば、音に対する興味・関心をさらに高めることが期待できるのではないだろうか。
- 8)物が落ちていた時にそれを拾ってくれる園児がいたら、みんなに聞こえるように「わぁ！○○ちゃん、拾ってくれてありがとう！」と少々大きめに声を掛ける。そうすることで、他の園児たちも褒められたいという気持ちを持ち、後片づけ等も自発的におこなうようになる。

VI. 新たに加えられた領域「表現」を踏まえた音遊びを目指して

前述したように、この度の教育要領や保育指針の改訂(定)に際して、「ねらい及び内容」の中の「表現」では、豊かな感性を養う際に、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」そして「自己表現を楽しむように様々な素材や表現の仕方に親しめるよう工夫すること」が加えられている。

ここでは、本研究の①～④の音遊びに関して、「ねらい及び内容」の「表現」の中でこの改訂で加えられた内容に照らしながら、今後実施したいと考えている音遊びを具体的に述べる。これらの音遊びを実施すれば、さらに多くの園児が音に関心を抱くものと期待される。

①音探し遊び：園庭に出て、身近な自然の音を探す。晴れた日であれば砂場の砂を掻く音、風の音、木の葉のそよぐ音、鳥の声を聴く。雨の日であれば、雨が傘に当たる音、地面や雨どいの下に空き缶を置き雨水が滴る音を聴く。これは、子ども自身が自然の中にある音に気付くことを目指した遊びである。

②身近なもので楽器作り：子どもたちとともにどんぐりやまつぼっくり拾いをして、拾ってきたどんぐりを容器に入れマラカスにしたり、まつぼっくりを割り箸やストローで撫でてギロにしたりと、自然のものを素材とした楽器作りをおこなう。

③手作り楽器で歌遊び：作った楽器を用いて様々なリズムを打ち合ってリズムで対話をし

たり、自分の弾きたいタイミングで楽器を鳴らしたりリズムを打ったりするなど、楽器どうしの音の重なりやリズムの重なりなど、作った楽器の音を使って様々な表現の仕方を楽しむ。

④**手作り楽器で発表会**：自分の楽器で音色を表現することを楽しみ、様々な素材で作った他の子供の楽器の音にも触れ、互いの音を聴き合いたい。晴れた日は園庭で、また、園の中であってもより音が響く空間でおこなうなど、音の響く環境を工夫することも試みる。

Ⅶ. 音遊びを小学校音楽科の授業につなげる

本稿の「Ⅲ.音遊びの全容」の「5)各遊びの概要及び子どもの反応」で示したとおり、音遊びに参加した子どもたちは、みな生き生きと前向きに遊びに加わり、様々な音に関心をもつことができていた。また、全員そろって嬉しそうに歌い、手作り楽器の合奏も楽しんでいる様子であった。

この光景こそまさに、新学習指導要領が掲げる「楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。」に合致したものであり、主体的かつ対話的で深い学びにつながるものと云うことができる。

この度改訂された小学校学習指導要領の教科音楽における『目標及び内容』の「第1学年及び第2学年」に照らして、当ゼミが行った①～④の音遊びそれぞれが指導要領の各項目と如何に対応付けられるかの検討を試みた。次にその結果を示す。

①**音探し遊び**：水の入ったグラスをマドラーで叩いて「ちょうちょう」を演奏した際に、これを聴いて、全身ノリノリになってリズムをとっていた2歳児がいたり、スキップの足音を聞いて、足音と同じリズムで手拍子していた3歳児がいた。また、4歳児、5歳児になるとオノマトペで感じた音を我先に口にするなどの光景がみられた。

[2内容_A表現_(3)_ア_(ア)], [2内容_A表現_(3)_イ_(ア)]

②**身近なもので楽器作り**：3歳児には、豆を入れた容器を振って音を出すだけではなく、手で太鼓のように叩いて、豆が容器に当たって出る音と叩いたことで出る音を区別して両方の音を楽しんでいる様子がみられた。また4歳児には、豆を入れた容器をバチで太鼓のように叩いて音を楽しんだりする園児もいて、友達同士で楽器を振るなど音を鳴らし合っていて楽しんでいる園児もいた。多くの5歳児が自分だけの楽器を作るのを楽しんでいたり、何度も音を出して試したりしながら、丁度良い音になるように容器の豆の量を調節する園児、一度楽器を作ったが納得がいかなかったのか作り直している園児もいた。また、ティ

ッシュ箱を使ってギターを作るなど、自分の知っている楽器を作ろうと様々な工夫を凝らす園児も見られた。

[1目標(3)]

③**手作り楽器で歌遊び**：2歳児の中には、ただ楽器を振って音を出しているだけの園児がいる一方で、3歳児が楽器を鳴らしながら歌っている時に、一緒になって自分の楽器を鳴らしている園児もいた。3歳児には、「山の音楽家」の歌詞の「キュッキュッキュ」の部分でタイミング良く鳴らしている園児がいたり、2歳児の演奏を待ちきれず一緒に音を出す子どもがいたりする中で3歳児の多くは静かに聴くことができていた。4歳児になると、ゼミ学生と一緒に「まつぼっくり」を大きな声で歌い、作った楽器を嬉しそうに保育者に見せながら「自分だけの楽器」という気持ちからか、楽器を「持って帰ってもいい？」と保育者に尋ねるなど、愛着が湧いている様子を見せている園児もいた。多くの5歳児は、作った楽器をゼミ学生に自慢気に見せたり、友達どうしで楽器を見せ合ったりしていたり、また、大きな声で元気良く歌いながら楽器を一生懸命に鳴らしているなど、音遊びを大いに楽しんでいる様子で、特に「おもちゃのチャチャチャ」で多くの5歳児がリズムよく鳴らしながら大きな声で歌っていたことは印象的であった。

[2内容_A表現_(2)_ウ_(イ)], [2内容_A表現_(3)_ウ_(ア)]

④**手作り楽器で発表会**：全員での合奏が始まると、待ちきれない3歳児は、4、5歳児の演奏に合わせてながらも自然と楽器を鳴らしていた。同様に4歳児は、2歳児と3歳児が「山の音楽家」を演奏している時に一緒に楽器を鳴らしていた。そしてゼミの学生がハンドベルで「にじ」を演奏している際は、歌を口ずさんだり、楽器を鳴らしたりする園児、歌いながら楽器を鳴らす園児もいて、皆が自然に合奏に参加している様子を見せていた。5歳児では、ほとんどの園児が静かに2歳児・3歳児の「山の音楽家」の演奏を聴くことができていた。そして、ゼミ学生がハンドベルで「にじ」を演奏し始め、何の歌なのか分かれると少しずつ歌詞を口ずさむ園児が増え、ついには大合唱になって、生き生きとした表情で楽器を鳴らす園児もいた。

[2内容_A表現_(2)_ウ_(ウ)]

以上のとおり、園児たちが参加した音遊びは、新学習指導要領が目指す目標に多くの点で合致していたもの考えられ、今後さらに充実した遊びとする上での励みにもなった。

ここで、参考のために新学習指導要領の中から特に該当部分を抜粋して次に示す。

文部科学省『小学校学習指導要領』（2017）

「第2章 各教科 第6節 音楽 第2 各学年の目標及び内容」より抜粋

〔第1学年及び第2学年〕

1 目標

(3) 楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。

2 内容

A 表現

(2) 器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。

(ア) 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能

(イ) 音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能

(ウ) 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能

(3) 音楽づくりの活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 音楽づくりについての知識や技能を得たり生かしたりしながら、次の(ア)及び(イ)をできるようにすること。

(ア) 音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること。

イ 次の(ア)及び(イ)について、それらが生み出す面白さなどに関わらせて気付くこと。

(ア) 声や身の回りの様々な音の特徴

ウ 発想を生かした表現や、思いに合った表現をするために必要な次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。

(ア) 設定した条件に基づいて、即興的に音を選んだりつなげたりして表現する技能

VIII. まとめ

鈴木(2017)は、「特集：幼児期に育まれた豊かな感性と表現等の基礎 音や音楽を楽しむ幼児の育成」の中で、幼児と音楽表現の関わりについて次のように述べている。

『幼児は、教師との信頼が築かれ、友達との関わりが安定してくると、いろいろな活動に自ら取り組み、自分をありのままに表現するようになる。そして、周囲から様々な刺激を受け、意欲的に遊びや活動を楽しむようになる。教師は、幼児の様々な生活や遊びの中から生まれている、自由で素朴な表現に心を留め、全面的に受容し、共感し、楽しさを分かち合う感性を必要とされる。また、今後、音楽表現につながっていくと思われる活動や環境について、幼児の日々の姿や発達の状態を理解し、無理なく音楽的な表現へと導いていく環境の準備や構成及び柔軟な対応ができる力量をもつことも大切である。このような教師や環境との関わりが、幼児の多様な表現を生み出し、自由に表現する楽しさや喜びを

味わい、表現意欲を高める要因になると考える。』

初等教育資料 2017 年 1 月号 「特集：幼児期に育まれた豊かな感性と表現等の基礎 音や音楽を楽しむ幼児の育成」 徳島県徳島市立千松幼稚園園長 鈴木美喜子 p.92 より

筆者も、上記の考え方に深く賛同する。特に、冒頭の「幼児は、教師との信頼が築かれ、友達との関わりが安定してくると、いろいろな活動に自ら取り組み、自分をありのままに表現するようになる。」というところに共感する。園児と援助者、生徒と教師、学生と教員との関係も、まさに人と人との信頼関係が基本である。

筆者も常々、音や音楽に対して、子どもがどのようなことに興味・関心を向け、どのような反応を示すかについて、予想した子どもの姿と照らし合わせながら理解していく必要があると考えている。しかし、当ゼミでの音楽遊びの実施は年に一度の単発でおこなっており、日ごろの子どもの様子がわかっているうえでの実施・観察ではないため、本来の個々の子どもの様子はどうしても見えづらいと云わざるを得ない。時間的な制約もあるが、定期的な関わりをもって子どもとの関係を積み重ねていくことで、ありのままの子どもの様子が見えやすくなるであろうということを、機会のあるごとにゼミの学生にも云い聞かせている。

これらのことに加えて、保育施設でおこなう音楽遊びに関する基本事項として筆者が常に考えていることを再掲して、本稿のまとめとしたい。

音楽遊びの目標は、音や音楽に親しみを覚え、関心を抱くようなきっかけとなる機会を園児たちに提供することである。「音」には、自然の音や身近な生活の中で出る音、人工的に作り出した音、その中には安らぎ感じる音や素敵・好きだと感じる音や、好きではない・不快と感じる音など様々な「音」がある。園児たちに日常の私たちの身の周りにはたくさんの「音」が溢れていることを、まずは実感してもらうことが出発点である。その後は、その音を園児自ら生み出し、メロディやリズムを付けて『音楽』として自分なりに表現するまでを体験できる場を設けることを目指したい。さらに、園児たちは集中力を長く保つのが難しい年齢でもあることから、あそびの援助者はその点にも配慮して園児全員に気配りし、明るく楽しい雰囲気醸し出す工夫が必要であろう。援助者自身が気さくで温かみのある声、態度で接することは必須である。

これらの基本事項を踏まえ、「音楽表現」を担当する教員として、これからも学生指導に努めたい。

引用文献

- 1) 井口太／代表編著「新・幼児の音楽教育 幼児教育・保育者養成のための音楽的表現指導」 朝日出版社 平成 26 年 1 月
- 2) 小西行郎・小西薫・志村洋子「運動・遊び・音楽」赤ちゃん学で理解する乳児の発達 保育第 2 巻 一般社団法人 日本赤ちゃん学協会編集 中央法規出版(株) 平成 29 年 7 月

- 3) 鈴木美喜子／徳島県徳島市立千松幼稚園園長「[事例]特集：幼児期に育まれた豊かな感性と表現等の基礎 音や音楽を楽しむ幼児の育成」初等教育資料 ㈱東洋館出版社
平成 29 年 1 月
- 4) 「小学校学習指導要領」文部科学省 平成 29 年 3 月

参考文献

- 1) 「保育所保育指針」厚生労働省 平成 29 年 3 月
- 2) 「幼稚園教育要領」文部科学省 平成 29 年 3 月
- 3) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」内閣府・文部科学省・厚生労働省
平成 29 年 3 月
- 4) 無藤隆「3 法令改訂(定)の要点とこれからの保育」㈱チャイルド本社 平成 29 年 7 月
- 5) 木村吉彦／上越教育大学「これからの幼小・小中連携について考える—その基本的な考え方と連携の具体的な在り方—」高田教育研究会編 教育創造 137 号 平成 13 年 3 月
- 6) 岡本拓子／高崎健康福祉大学短期大学部「音楽指導において、幼小連携をいかにつくるか」ラウンドテーブル VII 報告 学校音楽教育研究 日本学校音楽教育実践学会紀要 Vol. 10 日本学校音楽教育実践学会 平成 18 年 3 月
- 7) 太田正清／中国学園大学「小学校における基礎的な表現の能力育成に関する調査」学校音楽教育研究 Vol. 16 平成 24 年
- 8) 本村弥寿子「保育内容『表現』における学生の学びについて」
長崎女子短期大学紀要第 41 号 平成 29 年 3 月
- 9) 鈴木美喜子／徳島県徳島市立千松幼稚園園長「[事例]特集：幼児期に育まれた豊かな感性と表現等の基礎 音や音楽を楽しむ幼児の育成」初等教育資料 ㈱東洋館出版社
平成 29 年 1 月
- 10) 久富陽子／編「幼稚園・保育所実習 指導計画の考え方・立て方」㈱萌文書林
平成 21 年 5 月
- 11) 高御堂愛子・植田光子・木許隆／監修・編著「保育者をめざす 新しい音楽表現」圭文社
圭文社 平成 29 年 10 月